九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

二〇一五年度輔仁大学日本語文学科国際シンポジウム×「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」台湾大会「文化翻訳／翻訳文化」

大場，健司
九州大学大学院地球社会統合科学府 ： 博士後期課程2年

https://doi.org/10.15017/1901289

出版情報：九大日文. 27, pp.54-58, 2016-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

◎イベント・レビュー

二〇一五年度輔仁大学日本語文学科国際シンポジウム×「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」台湾大会「文化翻訳／翻訳文化」

大場健司（おおば・けんじ）

二〇一五年一一月一四日、一五日の二日間にわたって、台湾の輔仁大学で、日本語文学科の国際シンポジウムとして、「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」第三回大会が開催された。このフォーラムは、東アジアの日本語文学研究者が集まって研究発表を行う場として、二〇一三年に設立されたものである。韓国・中国・台湾・日本の各大学を会場に開催されることになっており、第一回大会は韓国の高麗大学校日本研究センター（二〇一三年一〇月一七―一九日）で行われ、第二回大会は北京師範大学外国語学院（二〇一四年一〇月二四―二六日）で行われた。これまでのフォーラムの成果は、雑誌『跨境 日本語文学研究』（笠間書院、二〇一四年九月―）の投稿論文に見ることができる。

今回の台湾大会では、一日目に三会場に分かれて「文化翻訳／翻訳文化」をテーマにした発表と総合座談会「文化／翻訳」が行われ、二日目には二会場に分かれて大学院生による発表を中心とした次世代フォーラムが行われた。フォーラム開催に当たっては、国際学会プロシーディングとして予稿集が発行された。近年、「日本文学」から「日本語文学」へと研究対象が変ってきている背景には、伝統的なキャノン研究の行き詰りや、各国文学史的ナショナリズムへの批判があると言ってもよい。今回のフォーラムでは、「東アジア」という視点を導入することで、日本という国家の自明性が疑われたのではないだろうか。

比較文学を専攻する筆者にとって、このような「国家」の枠組みを相対化する作業は、何も真新しいものではない。しかし、重要なのは、日本語文学研究において、国境を越える研究が志向されていることである。このフォーラムでは、「東アジア」という視座を導入することで、国家の枠組みを超えたテクスト読解の可能性が示されていた。

一日目の総合座談会において鄭炳浩氏が述べられていたように、今回のフォーラムの発表は、「日本近代文学」／「東アジアと日本語文学」／「植民地文学」の三つのジャンルに分けられるだろう。フォーラムのテーマが「文化翻訳／翻訳文化」であったため、日本近代文学を論じる際にも、翻訳やアダプテーション（翻案）に焦点を当てたものが多かった。例えば、徳永光展氏「夏目漱石『心』英訳における話法の処理――Meredith Mckinney による翻訳を資料として――」は、夏目漱石（一八六七―一九一六年）の小説の英語訳を扱った典型的な翻訳研究と言えるだろう。今回のフォーラムでは、俳句の翻訳についての発表もあり、中根隆行氏「朝鮮俳句の戦前戦後――俳句の文芸性と文化翻訳」、藤田祐史氏「芭蕉と Basho: リービ英雄『千々に

くだけて』論」の二つの発表があった。中根氏の発表においては、朝鮮俳人、李桃丘子（一九二三―二〇一三年）の俳句活動を論じることで、従来の俳句研究には収まりきらない文化翻訳の問題が扱われていた。

このように、「東アジア」という視座を導入することで、従来の日本近代文学研究を異化することができる。第二セクション（第二会場）では、河野龍也氏「言語体験としての旅――佐藤春夫の「台湾もの」における「越境」――」、黄翠娥氏「旅行者徳富蘇峰がまなざした中国、台湾」の二つの発表が行われ、佐藤春夫（一八九二―一九六四年）と徳富蘇峰（一八六三―一九五七年）による東アジア（台湾、中国）表象が論じられた。

このような日本近代文学のキャノンから植民地へのまなざしを扱ったものとは逆に、植民地文学においては植民地の人々の帝国日本へのまなざしを窺うことができる。例えば、徐東周氏「植民地青年の「移動」と「近代文学」の再翻訳」では、植民地期台湾での日本語文学が論じられた。また、第四セクション（第二会場）では、兪在真氏「翻訳装置としての広告――植民地朝鮮における「内地」書籍広告文」と日比嘉高氏「1945 年以前の台湾における日本語書籍雑誌の流通――書店、組合、新聞社」の発表が行われ、植民地時代の朝鮮や台湾における広告や書籍流通が論じられており、小説や詩といった文学作品には限定されえないメディアとその流通の問題が扱われていた。

次に、筆者の専門である安部公房（一九二四―一九九三年）研究について述べておきたい。王佑心氏「安部公房「バベルの塔の狸」における目玉の重層性――「翻訳不可能」の翻訳のために――」では、安部公房「バベルの塔の狸」（『人間』一九五一年五月号）に登場する「目玉」の意味が翻訳論的に説明された。この「目玉」については、筆者は以前から、見る／見られるという「まなざし」の問題が実存主義的に表現されたものと読解していたため、発表終了後に質問を行った。また、李先胤氏「マンガ、アニメ、文化の翻訳――手塚治虫テクストにおける〈越境〉」では、手塚治虫（一九二八―一九八九年）のマンガ『吸血魔団』（東光堂、一九四八年一〇月）において、ミクロ化した人間が人体に入っているという点で、安部公房「壁――S・カルマ氏の犯罪」（『近代文学』一九五一年二月号）との類似が指摘され、安部公房とサブカルチャーの関係性が示唆された。発表者の李先胤氏は博士論文『水の表象と暴力批判――安部公房における科学的認識と文学』を東京大学に提出して学位を取得されており、筆者の発表の際にも質問をしてくださった。筆者は「越境する『砂の女』――安部公房とアメリカ文学の相互交通――」と題する発表で、安部公房『砂の女』（新潮社、一九六二年六月）におけるアメリカ文学受容について発表し、日比嘉高氏や李先胤氏からコメントを頂くことができ、貴重な体験となった。

また、今回のフォーラムではサブカルチャー関連の発表も盛んに行なわれていた。筆者が聴講することができなかった発表に、横路明夫氏「クローンの意味（物語）――『新世紀エヴァンゲリオン』をめぐって――」がある。予稿集に収録された予稿を読む限りでは、アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』（テレビ東

京、一九九五年一〇月―一九九六年三月）が、東浩紀（一九七一年―）や宇野常寛（一九七八年―）らの言説との関係で論じられていて、興味深かった。筆者としては、『新世紀エヴァンゲリオン』での実存主義やポストモダンの受容について質問したかった。

以上のように、フォーラムでは、「日本」という国家の枠組みに限定せずに日本語文学を読み、その「外部」（東アジア、サブカルチャーなど）の視座を導入することで、新たな読解の可能性が提示されたのではないだろうか。その際、「翻訳」とは「内部」と「外部」を繋ぐ通路のようなものだろう。かつてエドワード・W・サイード（Edward Wadie Said, 1935-2003）は、『世界・テキスト・批評家』（*The World, the Text, and the Critic*, 1983）の第九章「文学と体系の間の批評」（"Criticism Between Culture and System"）において、ジャック・デリダ（Jacques Derrida, 1930-2004）の脱構築的読解の対象が西洋のテクストに限定されていることをヨーロッパ中心主義的であると批判した。この時、サイードの立場は非西洋にまなざしを向ける比較文学者的なものであり、「西洋」という中心に対して「外部」的な位置にある。しかし、東浩紀は、サイードの立場が間違いなく正しいものであることを認めたうえで、デリダによるテクスト読解を、ヨーロッパ中心主義を「内部」から破壊するものとして肯定している（『存在論的、郵便的――ジャック・デリダについて』（新潮社、一九九九年一〇月）四三―四八頁）。つまり、デリダの立場はキャノンの新しい読解の可能性を内部から開くものと言うことができる。ここで重要なのは、サイード的であれ、デリダ的であれ、日本語文学を「外部」（東アジア）／「内部」（キャノン）から論じるのであれ、日本という国家を「内部」からのみならず同時に「外部」から見つめる視座こそが必要だということである。

最後に、会場内外でお世話をしてくださった輔仁大学のスタッフや学生の方々にも感謝申し上げたい。また、今回のフォーラムについては、輔仁大学日本語文学系のホームページ（http://www.jp.fju.edu.tw/modules.php?name=Webpage&pa=showpage&pid=1014）にも掲載されている。

○二〇一五年度輔仁大学日本語文学科国際シンポジウム×「東アジアと同時代日本語フォーラム」台湾大会「文化翻訳／翻訳文化」

場所　台湾・輔仁大学 済時楼九階
日時　二〇一五年一一月一四―一五日
主催　輔仁大学日本語文学科
協賛　輔仁大学科技部、教育部、研発処、公共事務室
後援　高麗大学グローバル日本研究院日本語文学・文化研究センター、名古屋大学大学院文学研究科、北京師範大学外国言語文学学院日文系

【一日目】「東アジアと同時代日本語フォーラム」台湾大会

○中根隆行（愛媛大学）「朝鮮俳句の戦前戦後――俳句の文芸性と文化翻訳」

○金孝順（高麗大学）「細井肇篇《通俗朝鮮文庫》と造られる朝

鮮的価値――「洪吉童伝」の人物造形と琉球征伐エピソードを中心に――」

○李志炯（淑明女子大学）「近代東アジアにおけるハンセン病と優生学の移動――韓日の優生政策と文学からの文化翻訳的考察――」

○陳宏淑（台北市立大学）「ヴェルヌから包天笑まで――『鉄世界』の重訳史――」

○劉春英（東北師範大学）「中国における日本女性文学の百年受容史について」

○徐東周（梨花女子大学）「植民地青年の「移動」と「近代文学」の再翻訳」

○和泉司（豊橋技術科学大学）「邱永漢「西遊記」を読む――日本における「西遊記」翻訳と邱永漢訳版の意味」

○大東和重（関西学院大学）「平地先住民の失われた声を求めて――日本統治下の台南における葉石濤の考古学・民族学・文学――」

○冨田哲（淡江大学）「元台湾語通訳者市成乙重とアジア・太平洋戦争期の「福建語」」

○李漢正（祥明大学）「韓国における三浦綾子の『氷点』」

○単援朝（崇城大学）「大内隆雄の翻訳活動について――「満人作家」の理解者、代弁者として――」

○王志松（北京師範大学）「「物語」のための冒険――村上春樹に於けるチャンドラーの受容」

○張桂娥（東呉大学）「翻訳児童文学にみる文化翻訳の創造性と多様性――言葉遊び絵本『なぞなぞのたび』の中国語訳を手がかりに――」

○河野龍也（実践女子大学）「言語体験としての旅――佐藤春夫の「台湾もの」における「越境」――」

○黄翠娥（輔仁大学）「旅行者徳富蘇峰がまなざした中国、台湾」

○工藤貴正（愛知県立大学）「北京から台湾にやって来た大正生命主義――『台湾民報』における張我軍の時差翻訳を視座として」

○厳仁卿（高麗大学）「在朝鮮日本人による朝鮮民謡の翻訳と文化表象」

○兪在真（高麗大学）「翻訳装置としての広告――植民地朝鮮における「内地」書籍広告文」

○日比嘉高（名古屋大学）「1945 年以前の台湾における日本語書籍雑誌の流通――書店、組合、新聞社」

○石田仁志（東洋大学）「文化翻訳のアポリア――周金波「志願兵」ほか」

○佐藤敬子（元横浜市立大学兼任講師）「永井荷風『ふらんす物語』論――文化翻訳の解釈試論――」

○徳永光展（福岡工業大学）「夏目漱石『心』英訳における話法の処理――Meredith Mckinney による翻訳を資料として――」

○王佑心（銘伝大学）「安部公房「バベルの塔の狸」における目玉の重層性――「翻訳不可能」の翻訳のために――」

○横路啓子（輔仁大学）「李登輝の翻訳ストラテジー――司馬遼太郎『台湾紀行』を例に――」

○金想容（輔仁大学）「日本統治時代の「日本味」――台湾における「味噌」の渡来と受容状況をめぐって」
○鄭家瑜（政治大学）「『日本書紀』に見る漢籍の影響と表現――持統天皇の形象を中心に」
○岡部明日香（岐阜女子大学）「白居易『琵琶行』と新体詩『琵琶行』」
○齋藤正志（中国文化大学）「古典文学における〈文化の越境〉――竹取物語の解釈変容――」
○金普慶（高麗大学）「アメリカ占領下の映画と翻訳――「雪夫人絵図」の映画化をめぐって――」
○中村祥子（輔仁大学）「記念映画として製作される『源氏物語』をめぐって――映画は文学の何を翻訳するのか」
○沈美雪（中国文化大学）「台湾における日本サブカルチャーの翻訳・伝播・表象――文化は翻訳され、そして広がる――」
○李先胤（高麗大学）「マンガ、アニメ、文化の翻訳――手塚治虫テクストにおける〈越境〉」
○横路明夫（輔仁大学）「クローンの意味（物語）――『新世紀エヴァンゲリオン』をめぐって――」
○張蓉蓓（輔仁大学）「日本の漫画の中国語訳について」

○総合座談会「文化／翻訳」
司会　横路啓子（輔仁大学）
パネリスト　王志松（北京師範大学）、鄭炳浩（高麗大学）、日比嘉高（名古屋大学）

【二日目】次世代フォーラム（大学院生研究発表会）
○藤田祐史（名古屋大学）「芭蕉と Basho：リービ英雄『千々にくだけて』論」
○葉可全（輔仁大学）「楊逵「新聞配達夫」試論」
○岡英里奈（名古屋大学）「旅する作家、旅する言葉――脱「文明批評」的藤村論のために――」
○李榮鎬（高麗大学）「朝鮮文学の会と在日朝鮮人文学」
○大場健司（九州大学）「越境する『砂の女』――安部公房とアメリカ文学の相互交通――」
○徐嘉乙（高麗大学）「「記憶の再生産」と「戦後責任」――『永遠のゼロ（永遠の0）』の「特攻隊」表象を中心に――」
○金城恵（北海道大学）「張文環にとっての「媳婦仔」――「芸妲の家」からの一考察――」
○金旭（高麗大学）「1930 年代初期における京城帝国大学予科の文芸活動研究――雑誌『清涼』を中心に――」
○李嘉慧（高麗大学）「近代国家の他者としての在朝日本人遊女――1910 年代『朝鮮及満州』、『朝鮮公論』における性病言説を中心に」
○釋七月子（名古屋大学）「台湾日本語世代の自分史」
○曾家琦（輔仁大学）「宮崎駿アニメ論――現実世界と〈異界〉から――『千と千尋の神隠し』を中心に――」
○李冠儀（輔仁大学）「台湾人の立場から見る靖国神社――台湾団結連盟靖国神社参拝事件を中心に――」

（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程二年）